

12 | 言語接触

ダニエル・ロング

〈学習のポイント〉

- ・ 言語が接触するとどのような現象が起きるか、その分類を考えること
- ・ これまで日本語の歴史の中で、日本語と他の言語との接触によって生じたピジンにはどのような言語的特徴があったかを理解すること
- ・ そして、どのような社会的状況がそれらを生み出したかを考えること

1. 言語が接触するとどんな現象が起きるか？

言語接触とは、2つの言語を話す人が接触を繰り返すことによって、片方または両方の言語が何らかの影響を受けて変化することをいう。

その影響とは様々な形で現れる。最もよく見られる程度の軽い言語接触の産物は借用語である。日本では西洋の言語から入った単語を外来語と言うが、実は漢語も古く中国から日本語に入った借用語である。

借用語を受け入れている言語を「受け手言語」と言い、その元の言語を「送り手言語」と言う。日本語の借用語は時代によって送り手言語が違っている。様々な時代に出た国語辞書に当たる書物に新しく登場した借用語を計算した資料がある。平安時代にはサンスクリット語（古代ヒンディ語）、室町時代はポルトガル語、江戸時代はオランダ語、明治にはフランス語とドイツ語、近代以降は英語のそれぞれの言語が日本語借用語の供給源となっている。

借用語は個別単語であるので、これらの導入によって日本語の語彙が

増えてより豊富になったのであるが、日本語の文法構造に対する影響はほとんど皆無である。しかし、文法構造まで変わってしまう言語接触現象もある。ピジンと呼ばれる言語接触現象で文法体系まで単純化される。外国語と日本人との接触によって生じたピジン日本語の実例をこの章で見る。ピジンを使う人々はみんなそれぞれの母語があり、間に合わせ的なコミュニケーション手段である。

ピジンは接触していた言語（これらを起点言語という）に比べて文法が単純化されており、語彙も極端に減少している。そのために、世間ではピジンが「ブローケン」（壊れている、破壊されている）などといわれている。ピジンを耳にして育った子どものコミュニティがある場合、不思議なことにピジンの「壊れている」ところや欠けている文法事項などが補充されていく。このように母語化することによって、他の言語の影響を受けることなく複雑化していったピジンのことを「クレオール」と呼ぶ。

ピジンやクレオール、借用語以外の接触言語には、2つの言語が単純化されないままで融合する混合言語や、外国語学習者の不完全な言語体系である中間言語、外国人に向かって使われるフォリナートークなどがある。

2. 日本語と言語接触

従来、日本という国、および日本語という言語は、孤立したものとして描かれることが多かった。しかし、日本語の長い歴史の中で、他の言語との接触がほとんど皆無であった時期は鎖国時代ぐらいのもので、それ以外では、言語接触が繰り返されていたと思われる。

日本語そのものは言語接触によって生まれた可能性が指摘されている。日本語の起源をめぐる諸説には、オーストロネシア語族の基層言語

とアルタイ語族の上層言語からなったというクレオール言語説と、この2つの言語を基層言語と上層言語と定めない混合言語説など、様々なものがある。いずれにしても、紀元前の日本列島における複数の言語を使用した人々が、面と向かってコミュニケーションを行った言語接触状況がそれぞれの根底にある。

日本語は複数の言語が接触した結果、1つの言語に結晶したものである。その後も、他言語との接触が決して珍しいことではなかったようである。こうした言語接触が起きた形跡として挙げられるのは、日本語に入った借用語である。文字がアジアから導入される以前から、大陸の話者から「こめ」（米）や「うま」（馬）、また、日本語の「かみ（神）」が同じ意味を持つアイヌ語の kamuy に由来するという説もあれば、反対に日本語からアイヌ語に入ったという説もある。

大陸から導入された文字と合わせて、大量の単語も日本語に入った。そして、これらを伝えたのは人だったので、話しことばのレベルにおいても、渡来人と日本人との間に言語接触が起きたことは間違いない。日本側からも人が勉強や貿易のために大陸へと渡った。彼らは筆談で意思疎通を行った場合もあったが、話しことばのレベルにおいても、臨時的な（あるいは習慣化された）簡略化された言語体系（ピジンのようなもの）が使われたと考えるのが自然であろう。

近世に日本人とアイヌ人がコミュニケーションを取ったとき、アイヌ語を使っていた。「蝦夷通辞」と呼ばれていたのは松前藩出身のアイヌ語通訳であった。日本人として生まれた男の子が思春期を迎えるころに、アイヌ人の村に預けられた。自然にバイリンガルとなったこうした人が成人したら通辞を務めた。しかし、こうした通辞を通さずに、アイヌと通商を行った外国人はピジンアイヌ語を使ったと思わせる史料がある。イタリア人宣教師のアンジェリスが記録したアイヌ語の中には、リ

ンガフランカとして成立していたものが含まれている。

日本語と他言語との接触の舞台がやがて日本国内から国外へと広がる。契約労働者や労働という身分で、数十万人の日本人がオセアニア（ハワイなど）、南北アメリカ（ブラジルなど）、そして東南アジア（マレー半島など）で生活していた。これらの地域の中でハワイの言語接触が最も研究されている。

大東亜文化圏を提唱する大日本帝国が誕生すると、かつてないほどの日本語と他言語との接触が実現する。この場合、日本が統治したそれぞれの地域で、接触言語が発生するかどうかを決める様々な要因（日本語による学校教育の有無、現地の言語の数、統治の長さなど）を考慮しなければならない。現地の人々がほぼ完璧に習得した日本語を使った場合（朝鮮半島など）から、日本人が現地の言語を習得して使う場合（パプアニューギニアなど）まで様々である。また支配者の言語と現地語との間に生まれた簡略化された日本語が共通言語として使われたケースもある（ミクロネシア諸島など）。

日本に統治されたさまざまな地域で言語接触が発生した可能性は高いが、それに関する資料はきわめて少ない。1940年代の旧満州国で、現地の日本人住民と中国語話者との間に行われた接触言語の会話例が残されているが、こうした接触言語の実態や使用状況は把握されていない。

言語学の分野でも、戦前の植民地でどのようなバイリンガリズムがあったか、戦後、日本語がどのような跡を残したかなどの学問的な探究課題が残されている。最近、旧南洋諸島（ミクロネシア）における日本語の残存状況、および日本語と現地語との接触に関する研究が行われている。

戦前の植民地における日本語の影響を考えるため、パラオの例を見よう。パラオ語では日本語起源の借用語がたくさん使われている。若いパ

ラオ人の会話にも普通に出てくる例として次の単語が挙げられる。

- hadashi 裸足
- okyak お客
- skoki 飛行機
- skojio 飛行場
- tamatsuki 玉突き
- osoi おそい
- yasui 安い
- takai 高い
- karui 軽い
- daijob 大丈夫

興味深いことに日本語の意味が拡大したり、縮小したり、ずれたりしている場合がある。例えば、osoiは日本語の「おそい」に由来するが、スピードの遅いという意味にも、遅れているという意味にも使わない。パラオ語のosoiには「夜遅く」という意味しかない。また、karuiも日本語の「軽い」から来ているが、重さなどでの意味で使わない。パラオ語のkaruiには「へっちゃらだ」という意味しかない。

パラオ語・英語の辞書に掲載されている日本語起源の単語は508語にのぼる。辞書は347ページ分なので、計算すると10ページ当たり14個以上の日本語起源の単語が載っているということになる。

3. 日本人が外国人と話すときの行動(フォリナートーク)

日本人と外国人（特に日本語がうまくないと思っている外国人）と話すときに、ことばを分かりやすくするために、単純化された日本語に切り替える人がいる。こうした言語現象をフォリナートーク（「対外国人言語行動」）という。

以前に筆者は道行く人にある場所への行き方を尋ね、その答えを記録したが、何人かの答えに聞き手（筆者）は外国人であることを意識したフォリナートークが表れた。1つの例を紹介しよう。

筆者：すみません。〇〇大学はどこですか？

話者：〇〇はこっからまっすぐ行ってね、ええと、バスでないとあかん、ちょっと歩くとしんどいね、（あそうですか？）歩くとやね、時間長いね。（あそうですか。）歩いてね、ウォーク、ウォークでね。あのうね。（はい）あのうバスね、乗ったほうがいいなあ。

このように短い文に噛み砕いたり、「歩く」の後に「ウォーク」に切り替える「訳語」を入れたり、「ね」といった「理解確認表現」を頻繁に使う行動などは典型的なフォリナートークといえる。

フォリナートークがピジンと異なる点が大きく分けて2つある。1つは使う人の違いである。ピジンではその言語を母語とする人も、その言語を母語としない人も似たような単純化されたことばを使う。しかし、フォリナートークは母語話者だけが使う話し方である。2つ目の違いは、言語構造にある。フォリナートークはピジンと同様、非文になってしまうほど単純化されることもあるが、フォリナートークは母語話者だけが作り上げるものなので、外国語の影響を受けた表現は別に見られない。

4. 19世紀の横浜で使われたピジン日本語

19世紀に鎖国政策が廃止されると、開港横浜で「ヨコハマ・ダイアクト」と呼ばれたピジン日本語が港町ならではの多民族社会（日本人、中国人、英・米国人）におけるコミュニケーション手段として広く用い

られていた。ここで具体例を見よう。

- オマイ マー ナニ イロ アリマス？（あなたの馬は何色ですか？）
- アツイ サミー イロ ピギ ナイ？（季節によって色は変わりますか？）

この「オマイマー」は「お前の馬」という意味の名詞句である。標準日本語のこの名詞句は代名詞と名詞との間に属格の「の」が入るが、ピジン日本語でこの「の」が抜けるのは英語の影響とも考えられる。すなわち、英語では“your horse”という代名詞と名詞の2つだけから成り立っている名詞句である。標準日本語なら「です」が使われるところに、ピジン日本語で「アリマス」が使われるのは、英語や中国語では「です」も「あります」も同じ単語（beや「在」）に当たるからだと思われる。ピギは現代日本語のペケの原型であり、当時のピジンでは「だめ」から「商談が成立しない」、「去って行く」、「取り除く」まで幅広い意味で使われていた「多義語化」という現象に当たる。

ピジンは言語の簡略化、単純化であり、横浜ピジン日本語にもこうした現象が見られる。ピジンはよく「ブローケン」と軽視される。確かに、横浜ピジン日本語にも「ブローケンジャパニーズ」といえるような文法構造が破壊される側面がある。例えば、「ワタクシ テンポ ハイキン ナイ ナンガイ トキ」という文は「長い間天保を拝見していない」という意味で使われていた。日本語の否定表現「～ない」が動詞に接続するとき、文法的ルール（未然形に接続）を守らなければならないが、横浜ピジン日本語ではこの文法規則が「破壊」され、無視される。

ピジン日本語が19世紀後半の横浜で、貿易商人や外交官など、英語圏をはじめとする西洋人と、彼らと頻繁に接触していた地元の日本人や華僑（店主、召し使いなど）との間で使われていた。以下の例文から分か

るように、基本的な文構造（語順など）は日本語だが、語彙（内容形態素）は英語やピジン英語、フランス語などからも入っていた。

- “ワタクシ ナンガイ シャポー アリマス”（私の長い chapeau ありますか。）
- “ハウス アリマセン スコシ ハイキン マロマロ アリマス”
= House ありません，少し拝見回る回ります。（私の住まいはここではない。私は少し見て回っているのです。）
- “マー チャバチャバ シンジョー” = 馬 chobber chobber 進上。
（馬に餌を与えなさい。）

このピジン日本語は、世界のピジンに共通して見られる要素を複数持っている。それは(1)語彙が少なく、(2)多義的になっている（1つの単語は複数の意味や文法的役割を担う）、(3)文法が単純化され、「分析的」になっている、の3点にまとめることができる。

横浜ピジン日本語は少なくとも十数年にわたり使われていた。外国人だけでなく、日本人もある程度使っていた。横浜以外にも長崎や神戸といった開港場のコミュニケーション手段として使われていた。そして、チャンポン、チャブ台、ポンコツといった全国共通語の単語もこのピジン日本語に由来することが分かっている。

5. 形態素の分類

ここで言語学用語をもう少し紹介しよう。言語学では、言語の「意味を持つ最小単位」のことを「形態素」という。場合によって、形態素は単語と一致するのである。例えば、「うま」や「あたま」「しかし」というのはそれぞれ形態素である。「意味を持つ最小単位」と定義されるが、「あたま」は身体の上部分であるが、「あ」だけでは何かといえ、それ自体には意味がない。「た」にも意味がないし、「ま」だけでは何のこ

か分からない。「あたま」が意味を持つ最小単位といえる。一方、「食べさせられました」には複数の形態素が含まれている。「食べ」は語幹で、「させ」は「やらせる」という意味の「使役形」、「られ」は「受身」の意味、「た」が付いていれば「過去形」だという意味になるし、「まし」があれば、「丁寧」という意味になる。

形態素は、独立した単語となっている「自由形態素」と、独立して使えない「拘束形態素」に分けられる。自由形態素は辞書に「単語」として載っているが、「拘束形態素」は辞書に単語として載らないことが多い。そして、「自由形態素」をさらに、「内容形態素」（名詞、形容詞、動詞など）と「機能形態素」（助詞、接続詞など）に分ける。「拘束形態素」は「派生形態素」（接尾辞、接頭辞など）と「屈折形態素」（動詞や形容詞の活用部分など）にさらに分類される。

上で見てきた19世紀横浜のピジン日本語では機能形態素が除外されている場合が多いが、次に見るピジンマレー語は日本語の機能形態素をわざわざ取り入れたのである。

6. オーストラリアの日本人真珠採りが話したピジン

日本語が関係していた「ピジン」はオーストラリア北部でも報告されている。19世紀末から20世紀初頭にかけて、ブルーム地域で使われていた「真珠採りピジン」である。この接触言語の文法基盤となったのはマレー語だったが、アボリジニーが使っていたピジン英語や主流英語からも語彙が入っていた。日本語からもかなりの語彙が入っていた。例を見よう。

- Banyā *saki -rra* minom *yō*（お酒などをよく飲むよ）
- Burē masa *sē*（パンを焼け！）
- Pōrr kicchī *-ya*（真珠が小さい）

- Ujan banyā ratang *-kā* tera karaja dekkō angkā (雨がもつとき
つくなったら、仕事をやめて、いかりを下ろす)

banyā *saki -rra* minom *yō* (お酒などをよく飲むよ) に見られる「酒」は内容形態素なので、それが取り入れられるのは不思議ではないが、「など」の意味で使われた「*rra*」は日本語の「そこらじゅう」や「僕ら」のラに由来する。強調を表す文末詞の *yō* も日本語起源である。こうした機能形態素は他にも見られる。Burē masa *sē* (パンを焼け!) の場合、「焼く」を意味するマレー語起源の masa は動詞であるが、それを命令形にするため、日本語起源の *sē* が用いられる。Pōrr kicchī *-ya* (真珠が小さい) に西日本の断定助動詞が見られる。ここでは述語のマーカースとして使われ、もしこれがなければ Pōrr kicchī は「小さな真珠」という意味になる。文法的機能が日本語の起源語からかなり変化している例も見られる。Ujan banyā ratang *-kā* tera karaja dekkō angkā (雨がもつときつくなったら、仕事をやめて、いかりを下ろす) に見られる *kā* は日本語の疑問詞に由来するが、ここでは条件文の構造に使われている。

7. 日本語がからんでいたピジン英語

20世紀半ばにも一種のピジン日本語が米兵と日本人との間で使われていたことが報告されている。戦後の浜松(など)で使われていたピジンは、使用期間は短かったと思われるが、アメリカ兵と彼らと関わっていた日本人の両方によって用いられたので、ピジンと言えそうだ。次の2つの文は米兵が使っていたものとして論文に挙げられているが、文の構成要素は英語よりも日本語に近い。

- “This you speak *sayonara*” (君が無くなったと言ったのはこれじゃないか)

- “*Sayonara. Meter-meter dai jobu; testo testo dammey-dammey.*” ([女性を連れて帰ろうとする日本人男性に向かって] さよなら、[彼女を] 見るだけならいいけど、試すのはだめだよ。)

1950年代、朝鮮半島で韓国人と米兵との間で使われたバンブー英語には日本語的要素が含まれていた。

こうしたピジン日本語は朝鮮半島(つまり、日本人がいないところ)でも共通言語としての役割を果たしていた。文献によると、米兵の身の回りのお手伝いをしていた韓国人少年が次のような言い方を用いた。

- “*Laundry hava-no. Water taksan cold. You speak taksan cigarettes catchie one day?*” (意訳: 水が冷たくて。洗濯物は持って来ていませんよ。一日で持って来たらタバコをたくさんくれると言っていましたか。)

米兵の言い方として “*Meda-meda one time, number one jo-san taksan chi chi hava-yes*” (ちょっと見てよ、あの素晴らしい女性は良い胸をしている) が挙げられている。「見た見た」や「嬢さん」、「沢山」、「乳」ももちろん日本語起源だが、語順さえ日本語の影響を受けている。文末にくる *hava-no, hava-yes* は英語の動詞と位置が異なる謎めいた要素だが、「ありません、あります」を直訳したものと考えれば謎が解ける。

朝鮮戦争後、韓国にいる米兵の数が減り、彼らの地元人と接触する機会が減り、必要ではなくなったこのピジンが消えた。

引用文献

- 荻野綱男 (1988) 「日本語における外来語の流入時期と原語」『計量国語学』16-4
 カイザー, シュテファン (2005) 「Exercises in the Yokohama Dialect と横浜ダイ
 アレクト」『日本語の研究』1巻1号
 ロング, ダニエル (1992) 「日本語によるコミュニケーション—日本語における
 フォリナー・トークを中心に—」『日本語学』13: 24-32 明治書院
 ロング, ダニエル (1998) 「日本における言語接触とバイリンガリズム—アイデン
 ティティと言語使用—」『日本語学』17.9: 108-117
 ロング, ダニエル (1999) 「地域言語としてのピジン・ジャパニーズ 文献に見ら
 れる19世紀開港場の接触言語」『地域言語』11: 1-10

13 アイデンティティ

ダニエル・ロング

《学習のポイント》

- ・アイデンティティが話者の所属や他の類の言語意識とどう違うかを把握すること
- ・「自己確認行為」理論の内容を理解すること
- ・アイデンティティと言語（方言）行動との関係がどのように測定されているかを知っておくこと
- ・沖縄や小笠原諸島をはじめ、日本各地においてアイデンティティがどのように言語行動と関わっているかを理解すること
- ・アイデンティティの形成と維持にはどのような要因が見られるかを考えること

1. アイデンティティとは

「アイデンティティ」は本来、社会心理学において提唱された概念だが、社会言語学や方言学では特に複数の方言などの言語変種の使い分け（いわゆる「コード切り替え」）を分析する際にアイデンティティという要因の影響を考える（小野原・大原，2005）。地域方言や社会方言の研究でよく用いられる「意識」，「志向」，「属性」などと深い関係にあるが、いずれの用語とも完全には一致しない。

「意識」は、（話者の）物事に対する考え方なので、その意味においては、アイデンティティは意識の一種といえよう。社会言語学では、「志向」は言語（や言語と関連する物事）に対する態度・評価の変数群